



＜モンテヴェルディ生誕 450 年記念シンポジウム＞

2017 年 12 月 9 日(土)
13:00～18:00

モンテヴェルディの オペラから広がる バロック・オペラの世界

早稲田大学早稲田キャンパス
26 号館 1102 会議室 (入場無料)

〈主催〉早稲田大学オペラ／音楽劇研究所
〈後援〉早稲田大学総合研究機構

＜プログラム＞

開会挨拶 荻野静男 (早稲田大学)

趣旨説明 萩原里香 (東京藝術大学)

【第 1 部】イタリア (13:00～)

司会：宮川直己 (東京ナオキーヴィオ
音楽研究所)

研究発表 1

大崎さやの (東京大学)
《ポッペアの戴冠》の台本作家プゼネッロ
について～歴史上の人物を扱った最初の
オペラ作家～

研究発表 2

辻昌宏 (明治大学)
カヴァリの《エリオガバロ》は何故、
上演中止になったのか？

研究発表 3

萩原里香 (東京藝術大学)
古代ローマ皇帝を題材としたオペラ
～イタリア・オペラを対象として～

《ポッペアの戴冠》第 3 幕より
ネロとポッペアの二重唱“Pur ti miro”

《離宮のオットーネ》第 2 幕より
オットーネのアリア

“Compatisco il tuo fiero tormento”

【第 2 部】ドイツ、ロシア (15:00～)

司会：大野はな恵 (東京大学)

研究発表 4

荻野静男 (早稲田大学)
ラインハルト・カイザーのオペラ
～ローマ皇帝ものを中心に～

研究発表 5

大河内文恵 (東京藝術大学)
18 世紀半ばのドイツ諸都市における
古代ローマ史劇によるオペラの状況
～C.H.グラウン《ブリタニコ》を例に～

研究発表 6

森本頼子 (金城学院大学)
エリザヴェータ女帝時代(1741～62 年)の
ロシア宮廷におけるオペラ・セリア上演
～古代ローマ史劇を題材とした作品を
中心に～

《オクタヴィア》第 1 幕よりピソのアリア
“Porto il seno”

《ブリタニコ》第 2 幕よりアグリッピーナのアリア
“Mi paventi il figlio indegno”

【第 3 部】全体討論 (16:40～)

司会：岩佐愛 (武蔵大学)

報告 1：中村良 (オペラ研究会)
“ローマ物”への抵抗：17-18 世紀フランス
における音楽劇作品の題材

報告 2：吉江秀和 (杏林大学)
J.C.バッハの《カラッタコ Carattaco》
(1767 年ロンドン・キングズ劇場初演)
～ロンドンで上演された古代ローマ帝国にま
つわるオペラ～

《カラッタコ》第 3 幕よりトリノバントのアリア
“Non è ver, che assise in trono”

閉会挨拶 大河内文恵 (東京藝術大学)

＜演奏協力＞

黒田大介 (テノール)

末吉朋子 (ソプラノ)

中谷路子 (ピアノ)

本シンポジウムは、早稲田大学総合研究機構オペラ／音楽劇研究所「バロック・オペラ」ワーキンググループによって企画されました。当ワーキンググループは、研究所所長・荻野静男とグループ代表・大河内文恵の呼びかけにより、バロック時代に関心を持つ同研究所招聘研究員を中心に、レパートリー研究を主な目的として集い、2016年度より活動を開始しました。活動2年目である2017年は、バロック初期、まさにオペラの黎明期に、その発展に寄与したクラウディオ・モンテヴェルディ（1567-1643）の生誕450年の記念年になります。

オペラの歴史において「最初のオペラ作曲家」と評価されるモンテヴェルディは、実在した人物を取り上げた世俗オペラ作品に初めて曲をつけた作曲家です。その記念碑的な作品こそ、1643年の謝肉祭の時期にヴェネツィアで上演された、彼の最高傑作《ポッペアの戴冠》です。これは、古代ローマの皇帝のなかでも、とくに暴君として伝わるネロ（イタリア語：ネローネ）と、その2番目の妻・ポッパイア（イタリア語：ポッペア）をめぐる物語で、現在、世界中の劇場でレパートリーとして定着しています。

本シンポジウムではモンテヴェルディ以降、古代ローマ帝国にまつわる歴史的題材がヨーロッパ各地のオペラにおいてどのように扱われているか、演奏による解釈も交えつつ、パネリストがそれぞれの視点で考察し、モンテヴェルディから始まるレパートリー展開の再考を目指します。

企画責任：萩原里香（バロック・オペラ WG メンバー）

<発表要旨>

大崎さやの：《ポッペアの戴冠》の台本作家ブゼネッロ について ～歴史上の人物を扱った最初のオペラ作家～

《ポッペアの戴冠》は、聖人を扱ったものを除くと、実在の人物を扱った最初のオペラであったが、この作品の上演をきっかけに、以降歴史上の人物を扱うオペラが隆盛していく。本発表では、《ポッペアの戴冠》の台本を執筆した、ヴェネツィア生まれの作家ジョヴァンニ・フランチェスコ・ブゼネッロ（Giovanni Francesco Busenello, 1598-1659）について、その台本作家としての活動を紹介しつつ、台本の持つ特質や、そこに見られる彼の思想について論じたい。

辻昌宏：カヴァッリの《エリオガバロ》は何故上演中止になったのか？

モンテヴェルディの後継者フランチェスコ・カヴァッリはオペラ作曲家として確固たる地位を築いたのだが、晩年の意欲作《エリオガバロ》は作曲を終えたのに寸前で上演中止となった。台本が書き換えられ、若手の作曲家によりもう一つの《エリオガバロ》が作られた。そこに働いていたのは劇場をめぐるどんな力学だったのだろうか。

萩原里香：古代ローマ皇帝を題材としたオペラ ～イタリア・オペラを対象として～

《ポッペアの戴冠》（1642-43）の上演以降、古代ローマの歴史はオペラの題材のひとつとなる。本発表では、18世紀半ばまでに古代ローマを取りあげたイタリア・オペラ（イタリア語で書かれたオペラを指す）がどの程度存在するのか、どの皇帝がもっとも登場するのか、上演都市・劇場、作曲家、台本作家、各国への影響など、いくつかの視点から調査分析し、その傾向を考察する。そのうえでネロ帝周辺人物を取り上げたオペラに注目したい。

荻野静男：ラインハルト・カイザーのオペラ ～ローマ皇帝ものを中心に～

ローマ皇帝を題材にしたラインハルト・カイザーのオペラ《誘惑されたクラウディウス》および《ローマの不穏、または高潔なるオクタヴィア》を中心にすえて発表を行う。まずカイザーのハンブルク時代の伝記をヘンデルやテレマン等との関係において述べ、それからこの二つのオペラの作曲、台本などに関する基本情報を扱う。最後に両オペラの上演史にも触れ、現代におけるその舞台制作の可能性を探りたい。

大河内文恵：18世紀半ば頃までのドイツ諸都市における古代ローマ史劇によるオペラの状況 ～C.H.グラウン《ブリタニコ》を例に～

ドイツ諸都市においては、17世紀半ばから18世紀半ばの約100年の間に30作品以上の古代ローマ史劇によるオペラが上演されているが、1720年代まではドイツ語とイタリア語が拮抗しているものの、1730年以降はイタリア語のみとなる。これらを上演都市、台本作家、作曲家別に概観した上で、1751年にベルリンで上演されたC.H.グラウン作曲《ブリタニコ》を取り上げる。

森本頼子：エリザヴェータ女帝時代（1741～62年）のロシア宮廷におけるオペラ・セリア上演 ～古代ローマ史劇を題材とした作品を中心に～

ロシアでは、エリザヴェータ女帝時代に、イタリア人宮廷楽長が中心となって最もさかんにオペラ・セリアの創作・上演が行われた。本発表では、この時期に上演されたオペラ・セリアのレパートリーを俯瞰したうえで、古代ローマ史劇を題材とした作品について、現存するロシア語翻訳台本をもとに分析し、18世紀ロシアにおいてこれらのオペラ・セリア上演がどのような意味をもっていたかを考察する。

中村良：“ローマ物”への抵抗：17-18世紀フランスにおける音楽劇作品の題材

フランスの王立音楽アカデミーでは、ローマ皇帝はもとより、ヨーロッパの歴史的題材を扱う作品は殆ど上演されなかった。その中でほぼ唯一“ローマ物”を題材として成功したバレ《ギリシャとローマの祭》（1723）の台本からは、音楽劇のジャンルで歴史的題材を扱うことに対して明確な抵抗があったことが読み取れる。この作品を軸に、フランスにおける音楽劇の題材とローマ物受容について報告する。

吉江秀和：J.C.バッハの《カラッタコ Carattaco》（1767年ロンドン・キングズ劇場初演）～ロンドンで上演された古代ローマ帝国にまつわるオペラ～

18世紀半ばのロンドンにおけるイタリア・オペラの上演状況の概要に始まり、古代ローマ帝国にまつわる題材のオペラ・セリア《カラッタコ》（J.C.バッハ）の筋書や出演者、当時の批評といった作品の基本情報を紹介する。そして、全体討論でも取り上げる予定の各国・各地域のオペラにおける古代ローマ帝国の扱いに関して、ロンドンの一般的傾向を簡潔に触れ、全体討論への橋渡しをおこなう。

テノール
黒田大介



ソプラノ
末吉朋子



ピアノ
中谷路子



早稲田大学早稲田キャンパス
26号館（大隈記念タワー）
11階1102会議室
※早稲田キャンパスマップ

<アクセス>

JR山手線／西武新宿線：高田馬場駅より徒歩20分
地下鉄東京メトロ東西線：早稲田駅3b出口より徒歩5分
東京さくらトラム（都電荒川線）：早稲田駅より徒歩5分
都営バス：早大正門前停留所より徒歩1分

http://www.waseda.jp/student/koho/13_campusmap_2017.pdf

<問い合わせ先>monteverdipro@gmail.com / Monteverdi Project@「バロック・オペラ」ワーキンググループ（代表：大河内文恵）